

二〇〇二年末に国立国語研究所長が外国の単語が氾濫している状況を警告し、六三の単語を国語に翻訳した事例を紹介した。アウトソーシングは外部委託とか業務委託、インターンシップは就業体験とか就業実習、シンクタンクは研究機関とか調査機関、フォローアップは追跡調査とか補正改善などで意味は十分に通用するというわけである。

東京ドームにある「野球の殿堂」に正岡子規が顕彰されている。病弱で早世した俳人と野球は関係なさそうであるが、子規は東京帝国大学在学時代に野球に熱中していたことで有名であるとともに、「野球」という言葉を創作したというのは俗説であるが、「四球」とか「投手」という言葉を創作した功績があるせいである。野球も四球も投手も、英語の意味を的確に翻訳しているが、このような名訳は明治時代には多数ある。

和魂洋才は明治の精神を象徴する四字熟語であるが、西洋の文物を巧妙に日本の社会に導入した明治の翻訳は、その秀逸な代表であった。反対に、現代は外国の言葉が氾濫している。その背景には、実体が外国で誕生して言葉とともに輸入されたせいでもあるが、敗戦以来もしくは明治以来の欧米崇拜が影響しているとも推察される。しかし、このような風潮は言葉に蓄積された固有の価値の軽視や喪失を社会にもたらす。

言葉に蓄積された価値の軽視の実例が地名の安易な変更である。郵便や荷物の配達などの利便のため、一九六〇年代に住居表示についての法律が制定され、日本各地で地名が大量消滅した。石川県金沢市は住居表示改正の実験都市とされ、それ以前には九三〇余が存在していた町名のうち約五二〇が消滅してしまった。全国の都市で〇〇町〇丁目という地名の大半は、この時期に変更された名前である。

このような傾向への反動が発生し、最近になって金沢では、主計(かずえ)、飛梅(とびうめ)など三町の名前が復権した。東京都台東区でも、住居表示法施行前には約一八〇であった町名が、再編により三四にまで減少してしまった。現在、いくつかの消滅した町名の復活が検討されている。一例として、かつての浅草猿若、浅草馬道などの名前は消滅して浅草六丁目になっているが、それぞれ復活させようと議論されている。

二〇〇〇年末に、アルファベットによる姓名の表記についての国語審議会案が発表された。我々は漢字では「姓名」の順番にするが、アルファベットになると何故か「名姓」の順序にする。明治時代になって欧米の習慣を導入した結果である。しかし、日本の姓名表記は「イエ」という組織が社会構造の基礎にあるという伝統を反映したものであり、それをアルファベットになると途端に逆転させるのは欧米崇拜の残滓ではない。

中国や韓国の人名が英文の新聞や雑誌に記載されるときは「姓名」の順番であることが大半であり、鄧小平は「TONG SHAU PING」、金大中は「KIM DEJUNG」と表記されるし、日本の放送などで「トウシヨウヘイ」とか「キンダイチュウ」と発音すると相手国大使館などから訂正の要求がある。国語審議会案は強制ではなく希望であるが、このような動向が出現してきたのである。

情報の本質は多様にあるが、一方で便利な通信技術の浸透によって世界は画一になる傾向にある。その画一の潮流に対抗しながら多様な社会を維持していくことが情報社会の発展の要諦である。その機会を提供するのが、伝統の言葉、旧来の町名、氏名の表記なのであり、それを社会から安易に抹殺していくことは、情報社会の衰退にほかならない。